

地理

7月号 July

KOKONSHOIN Vol.60,2015



特集 みんなで支える東京農業

石原 肇・宮地忠幸・林 琢也・深瀬浩三・今安典子

空き家問題の空間論的考察 益田理広・久保倫子

大雪山の自然の多彩さはなぜ生まれたのか? 小泉武栄

おいしい海の宝石のはなし 戸田真夏

表1 阪神大水害による被害

地域名(当時)	死者・行方不明者	家屋の流失 倒壊埋没	家屋の半壊	浸水家屋	橋梁流失
神戸市	616人	5,054戸	6,776戸	79,652戸	52カ所
武庫郡	48人	352戸	888戸	7,343戸	8カ所
その他	51人	326戸	966戸	22,375戸	70カ所
合計	715人	5,732戸	8,630戸	109,370戸	130カ所

六甲砂防工事事務所編『六甲砂防六十年史』, 2001, 102頁「地域別の一般被害」参照。
住吉村・本山村は上記武庫郡に含まれる。

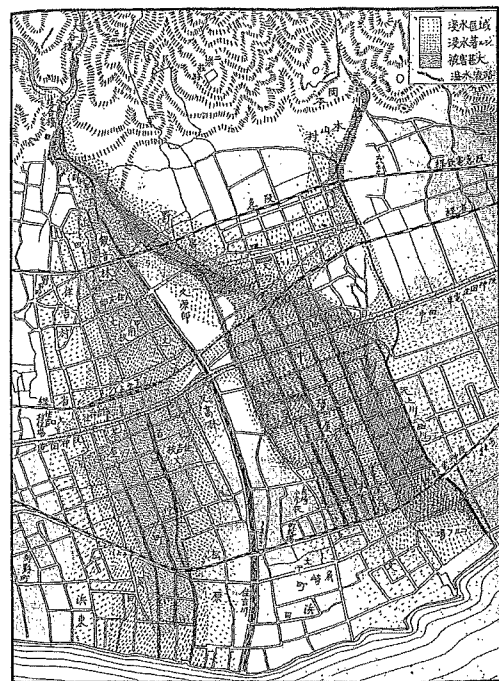


図1 住吉川流域水害図(出典:注(6))

流れ下り、市街地の広い範囲に大きな被害をもたらした。住吉川西岸は被災当時住吉村に属しており、その中心部はいわゆる「阪神間モダニズム」を代表する家屋敷が立ち並ぶ関西随一の富豪住宅地帯を形成していた。しかし被災によって壊滅的な被害を受けたのち、住む人も家屋敷も入れ

住吉川流域の被災に関する詳細な記録に、旧制甲南高等学校の校友会によって編纂された『昭和十三年七月五日の阪神水害記念帳』がある。こ

3 大水害による被災の概要

の復刻版と現地調査の結果に基づき、住吉川流域における被災の状況をまとめてみよう。
大水害は、6月11日の入梅後間断なく降り続いていた雨に、7月3日～5日の集中豪雨が重なって発生した。3日間の総降水量は六甲山頂直下に位置する住吉川上流域周辺で約600ミリに達した。5日の朝方にかけて広範囲な山崩れが起き、土石流が急傾斜の住吉川を流れ下るとともに、湾曲部や狹隘部で決壊して天井川の高い川岸から東西にも

1 はじめに

六甲山地の南側には神戸をはじめ、阪神間の都市域が広がっている。しかし、水害が起こりやすい自然条件を備えている点に留意しなければならない。すなわち、最も大きな被害をもたらした昭和13(1938)年7月5日の「阪神大水害」は、その危険性を明瞭に示すものであったが、発生から約80年が経過し、その被害体験も次第に忘れ去られてつづつある。被害体験から得られた教訓を風化させないための災害伝承のあり方を、被害の大きかった住吉川流域に

《災害に立ち向かう地理教育》 第22回

阪神大水害の被災と伝承 —住吉川流域における 記念碑を中心に—

川崎浩二郎 (佛教大学大学院修士課程)

地理教材研究会

2 住吉川流域における大水害の現地調査

六甲山地は全山がマサ土に覆われており、南側は急斜面で平野部は扇状地を形成し、多くの河川は天井川となっている。このため、集中豪雨に見舞われると土石流が発生して大きな被害をもたらす。その代表例が阪神大水害であり、これを機に砂防工事が国の直轄事業として行われるようになり、水害の被害程度は大きく軽減された。しかし、奇しくも大水害発生後70年目に起こった平成20(2008)年7月28日の都賀川水難事故^②のような、突発的な集中豪雨による災害が全国的に増加する傾向があり、本地域においても水害の発生に対する十分な備えが必要である。

大水害は、谷崎潤一郎の小説『細雪』にも詳述され、広く知られた災害であった。被災後80年近くが経過する今日では、次第に忘れ去られる存在となりつつある。多大な犠牲のうえに得られた貴重な教訓を風化させないため、現地に残された痕跡や記念碑等を通じた災害伝承に関する情報を収集し、データ化する調査を住吉川流域で実施した。

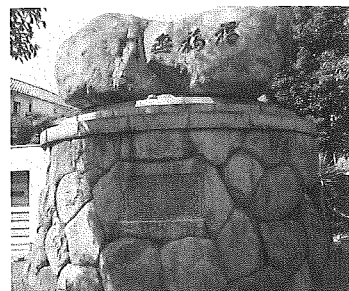


写真2 流石の碑



写真3 石碑「有備無患」

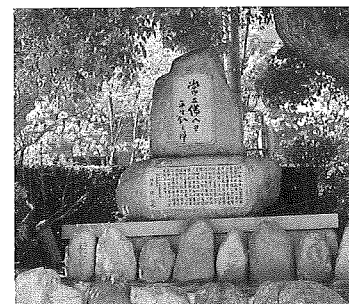


写真4 石碑「常二備へヨ」(甲南小学校)

より学舎が壊滅的な被害を受けた2年後に建立されている。学生・教職員ら38名の犠牲者を含む甚大な被害を乗

- ・形状 幅4m×奥行2・5m×高さ3m
 - ・刻字 正面「禍福無門」
 - ・建立 昭和14年12月、武庫郡住吉村
- 石碑「有備無患」(写真3)は旧本山村の野寄公園内にあり、高さ2・7mの碑正面に刻字されている。背面には建設工事関係者として本山村村長、助役2名、委員9名、設計者・工事請負者各1名の名が刻まれている。正面右隣にある石板には大水害を記念し建立された旨が記されている。

- ・形状 幅1m×奥行1・2m×高さ2・7m
 - ・刻字 正面「有備無患 海軍大将末次信正書」
 - ・建立 昭和16年辛巳春、本山村役場
- 石碑「常二備へヨ」は、大水害からの復興に際し平生飢三郎が当時の甲南高等学校生徒に訓示した言葉であり、これを記念する碑は甲南小学校と甲南大学の校内に建立されている。甲南小学校のもの(写真4)は大水害5周年を記念したもので、碑正面下には痛恨の災害を憂慮し堅牢なる新校舎再築を記念して建てられた旨が記されている。

- ・形状 幅0・8m×奥行0・8m×高さ2・5m
 - ・刻字 正面「常二備へヨ 平生飢三郎」
 - ・建立 昭和18年7月5日、甲南尋常小学校
- また甲南大学のもの(写真5)は、阪神・淡路大震災に

表2 住吉川流域に現存する記念碑

記念碑	所在地	
①水災記念碑	落合橋附近	旧住吉村
②流石の碑	住吉学園敷地内	
③石碑「有備無患」	野寄公園内	旧本山村
④直轄砂防事業50周年記念碑	清流の道公園内	
⑤石碑「常二備へヨ」	甲南大学校内	
⑥石碑「常二備へヨ」	甲南小学校校内	旧住吉村
⑦細雪の碑	甲南小学校東隣	
⑧細雪の碑	本山第二小学校北門	旧本山村

4 現地に残されている記念碑

住吉川流域では、大水害後に建立された様々な「記念碑」の存在が確認できた。表2はその全体であるが、このうち特徴的なものを紹介する。「水災記念碑」(写真1)は住吉川上流の落合橋附近にあるが、この辺りは扇状地の

替わって、かつての姿をとどめていない。当時本山村に属していた住吉川東岸は、土石流の直撃を受けた。とくに下流低地部は、密集住宅地帯が1カ月近くも滞水するという深刻な被害を受けた。表1は大水害による被害の全体概要であり、図1は『阪神大水害調査報告』に掲載されている住吉川流域水害図であ



写真1 水災記念碑

なり、川底も一気に土砂で埋め尽くされた。石碑の台座の右わきには、最高位の洪水水位が刻まれている。

- ・形状 幅0・7m×奥行0・5m×高さ1・9m
- ・刻字 正面「昭和十三年七月五日 水災記念 右有馬道左六甲道」
- ・建立 昭和14年4月、武庫郡住吉村

「流石の碑」(写真2)は、旧住吉村の富豪住宅地帯の中心に位置した旧観音林倶楽部の敷地内(現住吉学園)にある。この地に流れ着いた巨石を利用した記念碑は重さ約30トンもあり、碑の高さを被災当時の水位である3mと同じに設定しており、この高さまで土石流が押し寄せたことを記録している。刻字は当時の内務大臣・海軍大臣であった末次信正の揮毫による。

「扇のかなめ」の部分に位置しており、被災当日土石流はこの附近に集中したのち流れ下った。このため橋は落ちて跡形もなく

点からみれば、各々特別な意味を持つゆかりの場所に建てられている。時という視点からみれば、それらは被災直後あるいは周年の節目に建てられており、各々の意味合いにおいて時の経過の重みを直接肌で感じさせてくれるものである。そして「流石の碑」の巨石のように災害に関する情報の一つの物に凝縮する形で表現することによって、ミュージアムとは一味違った強いインパクトを与えることができる。大水害から長い年月が経過し災害の痕跡も見出しにくくなるなかで、記念碑は被災の記憶を呼び覚まし得られた教訓や知恵を将来につなぐ最も効果的な媒体のひとつとなりうるものである。

その一方で、記念碑はある特定の場所・時間での被災体験を象徴するものでもあるため、それらを効果的に結び付ける工夫が求められる。住吉川の場合、上流の扇状地の要にあたる地点から河口までが約3・5kmで1日をかけ川沿いに下るコースを組むのに最適な長さである。例えば、大水害が発生した昭和13年7月5日にタイムスリップしたと想定し、上流の「水災記念碑」を出発点に土石流の流れに沿って下りながら、各記念碑で被災状況を確認する。さらに当時の面影を残しながら川沿いに点在する白鶴美術館本館、灘中学校本館などのモダニズム建築にも立ち寄ってみ



写真5 石碑「常二備へヨ」(甲南大学)

り越え学園の総力をあげて新校舎が再建されたが、その際57年前の遺訓「常二備へヨ」を思い起こして、将来に万全を期すため建立されたものである。正面下の碑文には「阪神大水害1938年7月5日 阪神・淡路大震災1995年1月17日 天の災いを試練と受け止め、常に備えて、悠久の自然と共に生き、輝ける未来を開いていこう」という文字が刻まれている。

- ・形状 幅0・8m×奥行0・4m×高さ1・6m
- ・刻字 正面「常二備へヨ 平生飢三郎」
- ・建立 平成9年4月、学校法人甲南学園

『細雪の碑』は、甲南小学校東側と本山第二小学校北門に建立されている。とくに、後者(写真6)は『細雪』のなかで「(前略)腰かけて席から山手の方を望むと、ちよ

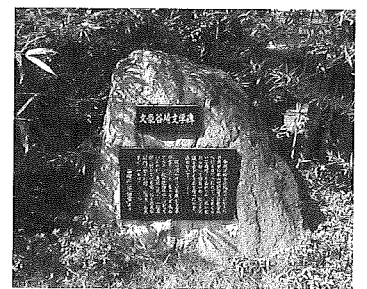


写真6 細雪の碑(本山第二小学校)

一節が刻まれている。田中眞吾によると「大水害のあと流石を利用し職員の労働奉仕により水禍記念園と名付けられた築山が作られた。それはなくなつたが、石のひとつは残されて碑となつた」ものであると記されている。

- ・形状 幅1・5m×奥行0・5m×高さ1・3m

5 おわりに

住吉川流域の現地調査では、大水害の痕跡として直接確認できる事例は限られていたが、こうしたなかで現地に記念碑が残されている意義は大きい。表2に掲げた記念碑はいずれも、建立した人々の災害との関わりやそれぞれの思いが込められており、それ故に多様である。場所という視

点。こうしたコースを組んでみるのも楽しく、意義あるものになるのではないだろうか。

〔注〕

- (1) 神戸市東灘区を中心に流れる天井川で、古来より清流で知られ灘五郷の酒造りの拠点となっている。
- (2) 平成20(2008)年7月28日、活発化した前線の影響により神戸市灘区を流れる都賀川流域で突発的・局所的な集中豪雨が降った。急激な水位上昇により16人が流され、うち11人は救助されたが、5人が死亡した。
- (3) 谷崎潤一郎は当時、住吉村に居住(旧邸「倚松庵」は現存)していた。谷崎の娘が同村内にあった旧甲南尋常小学校に在学しており、『細雪』のなかの大水害の記述は同校児童の作文集を参考にしたといわれている。
- (4) 現在の神戸市東灘区にあたる住吉村(住吉川西岸・本山村(東岸)は、当時武庫郡に属していた。
- (5) 20世紀初頭、六甲南麓の阪神間を中心に育まれた近代的な芸術・文化・生活様式をさす。当時関西では米国をモデルにインターアーバン路線の建設が相次いでいたが、これに伴い鉄道沿線で郊外住宅地の開発が進められ、御影・住吉の山手地区に豪奢な大邸宅が次々と建てられた。
- (6) 日本学術振興会 災害科学研究所編『災害科学研究所報告第1号 昭和13年7月5日 阪神大水害調査報告』1938、8頁「第6図 住吉川流域水害図」
- (7) 明治45(1912)年この地域に住む事業家の親睦団体として設立。大水害で建物の1階部分が土砂で埋没した。
- (8) 平生飢三郎(1866~1945)は、川崎造船所(現「川崎重工」)など多くの企業経営に携わり、教育者としても甲南小・高・女学校の設立に寄与し文部大臣も務めた。
- (9) 田中眞吾編(1988)『六甲山の地理 その自然と暮らし』神戸新聞出版センター